

## 最初の選挙

松岡健雄

故大平正芳氏と私との交友関係は、大正十二年四月以来、実に五十七年余にわたる長い期間続いたことになる。最初の出会いは、私たちが旧制香川県立三豊中学校に入学した時である。当時は現在とちがって、一学年がわずかに二学級であったため、同期生間の交流は極めて深かった。生来、私は野球が好きで、三年生の時には、野球部にはいり、毎日、運動場で泥まみれになって走り廻っていたが、彼は、たまには陸上競技などに親しんでいたが、どちらかという静かで学者タイプであった印象が強い。彼が図書委員などをやっていた記憶が残っていることから想像すると、当時から熱心な読書家であったようだ。昭和三年三月、大平氏と私は三豊中学を卒業した。そして、大平氏は高松高商から更に東京商大へ、私は旧制松山高専から岡山医大へと、まったく別の方向に進路をとったため、互いに顔を合わす機会は殆どなくなった。

二人が再会したのは、昭和二十七年、大平氏が衆議院選挙に出馬するため郷里に帰った時であった。私たちは久し振りに会ったことを喜び、選挙での必勝を誓い合った。中学生時代には大平氏が政治家になろうとは思ってもしなかったが、一旦決意した以上は是非でも当選してもらわねばと、中学の同窓会員が中心になって、選挙民に大平支持を訴えた。私も彼と一緒にトラックに乗って、応援演説をし、演説会場では前座をつとめたものである。この頃の彼の演説はお世辞にも上手といえたものではなかった。有名な「アーウー」は出なかったが、肩を左右に大きく揺り動かして、名調子にはほど遠い訥弁であった。聴衆は最初は、この演説に、相当、愕いたよう

だったが、訥々と語る彼の話に耳を傾けているうちに、なんとなく、好感を抱き始めていたようだった。

しかし、当人の大平氏はかなり自分の訥弁を気にしていたらしく、「しゃべるのは好かん。君ひとつ代りに立候補したらどうかね」と遊説の車中で、そっと私に弱気を洩らしたほどだった。この頃の伝説に、大平氏はその笑顔がかわいいので、選挙区の婦人層に大変人気があったというのが、私は、彼の人気の秘密は、何時も自然で淡々としていた人格にあると思っている。支持者が多くなったのは、彼の自ら図らない自然なものが、人の心を打ってきたのだと、私は確信している。

私的には、家庭的にも親しい付き合いを頂戴した。長男の結婚式には媒酌の労までとって下さったし、次男の東京での結婚披露宴には、大蔵大臣としての多忙な日程にもかかわらず、最初から最後まで出席され、約三十分にはわたる祝詞をいただき、私たち家族一同は、感激と喜びにひたつたものである。総理大臣になってからは、私は上京の機会にときどき官邸に表敬訪問したが、そのつど、医師としての自分の職業柄、大平氏の健康保持について進言したが、彼はきまっただように、「君こそあまり飲み過ぎないように」といい、互いに肩を叩いて大笑いしたものであったが、今にして思えば、あの頃もつとつとこく進言しておつたらと、残念でならない。

大平氏はまた大の読書家であり、名言、至言を多く書き残したことは周知の通りであるが、特に私の脳裏に深く刻み込まれている言葉に、「絶景在險峰」「良賈深藏如虚」「忙裏始知閑氣味」「坐医躁書医俗」等がある。これらは単に相手に呼びかけるだけでなく、大平氏自身が常に心掛け実践してきたことの表現であると思う時、意味の深さを味わわれるとともに、強い感銘を受けたものである。幅広い信念のある偉大な政治家大平氏に、郷土の学友の一人として、更に一層の飛躍を期待していた矢先、同氏が急逝されたことは、まことに痛恨の出来事である。わが国にとってはもちろん世界的にも大きな不幸である。

(前香川県医師会会長)